八尾歴史物語

遺跡から見つかる「変わったモノ」その③ ～木製鞍～

四十巻

市内の遺跡から見つかった「変わったモノ」として、前回は「手焙り形土器」をご紹介しましたが、今回は、八尾南遺跡で見つかった「木製鞍」のお話です。

鞍とは、人が乗馬する際に馬の背に置く馬具の一種です。鞍の構造は、前方に付く前輪と後方に付く後輪を居木で繋ぎ合わせたもので、今回見つかったのは前輪の部分になります。

鞍は井戸の中から見つかり、一緒に見つかった土器の年代から、5世紀前半（約1600年前）のものと分かっています。井戸の周辺では、馬を飼育するための建物や洗い場のほか、放牧地として使われた空間が見つかっています。洗い場や放牧地の地面にはたくさんの凹凸が見られ、馬が走り回っていたことが想像できます。また、馬の飼育にはたくさんの塩が必要で、建物からは製塩土器が見つかっています。

5世紀ごろの河内を中心とした地域は、たくさんの渡来人が生活をしていました。彼らは、最新の製品や技術、馬を日本に伝えました。八尾南遺跡では、韓式系土器と呼ばれる朝鮮半島の土器も見つかっています。この発見からは、渡来人とのかかわりがうかがえ、この地で馬の飼育や管理をなりわいとしていた人々が生活していたのかもしれません。

市内では、まだ八尾南遺跡だけでしか鞍は見つかっていませんが、四条畷市の蔀屋北遺跡では黒漆が塗られた鞍も見つかっています。当時の河内では、馬を重要な交通手段などとして活用していたことがうかがい知ることができます。

出典『八尾の渡来文化』

▲出土した木製鞍の前輪

☆問合せ　文化財課
TEL 924・8555
FAX 924・3785